

横浜市立大学 文理学部 数学教室

現在数学教室のスタッフは9名（他に事務員1名）で、教養部の一般教育および学部専門教育に当て、教員はそれぞれ5コマ（1コマは90分の通年講義）を、そのうち専門科目は、代数学（浅野洋・桂利行）、幾何学（一楽重雄・市田良輔）、解析学（中神祥臣・上野喜之雄・大阿久俊則）、応用数学（森俊夫・多賀保志・大阿久俊則）を担当している。

小生（多賀）は統計数学の教育・研究を行なっているが、もっかのところ衛星（ランドサットやノアなど）による隔測データと地上（海上）の実測データとの相関分析を行ない、環境汚染監視のための最適なサーベイランス・システムの策定に関心をもち、統計数理研究所と共同研究を行なっている。

また、卒業研究としては、ノンパラメトリック法の理論とアルゴリズム、情報化社会におけるデータ保護（特にRSA法によるデータの暗号化のアルゴリズム）、フラクタルの理論とシミュレーションを行なっている。

なお、横浜市立大学は21世紀への展望と発展を指向する総合理学研究科（大学院）を昭和64年4月に開設する予定で、現在着々と準備をすすめている。

従来の大学の学部学科は、縦割りの学問分野で編成され、また比較的狭い学問分野にとらわれがちであり、学際的方面への関心が強い社会的要請とかなり隔離していることは否定できない。21世紀に向けて限らない展望と発展性を秘めているのは、こうした新しい学際的分野であり、これに対処するために大学の研究、教育体制も変革していかねばならない。基礎研究と応用科学は従来は

深い係わり合いはなかったが、近来両者はお互いに接近しあうようになり、今後も密接に関係しあってさらに発展していこうとしている。このような学際的分野に研究・教育を深め拡充していくためには、複数の分野の研究者たちが単に集合するだけでは不十分で、彼らが必要に応じて研究の協同、連携や討議を行ない得る場として、総合大学院が必要である。これにより従来の学問分野の再編成へと発展していくことができる。

20世紀半ばからの科学・技術の歴史を踏まえて21世紀を展望するとき、

- (1) 分子および分子集合体の構造と機能の研究
- (2) 分子・細胞レベルでの生命体の構造と機能の研究
- (3) 生命体・非生命体のシステムの構造と機能の研究
- (4) 数理解析・数理構造の研究

などが自然科学の分野で普遍的なテーマであると考えられる。

いうまでもなく、(1)は新素材の開発という新しい機能をもつ物質の創製と、その応用との関連性をもつものである。(2)と(3)は生命の神秘の核心に迫るものであると同時に、具体的にはシステムとしての生命のメカニズムの解明につながるものである。またこの(2)、(3)のテーマの成果は生物工学の分野を進展させ、そして新しい医療・食品材料の開発や品質改良などに大きく貢献するものである(4)は(1)、(2)、(3)の研究に現われる構造と機能を理論化、学問として体系化するために必要である。

(多賀保志)

第14期 日本学術会議会員選任のお知らせ

本学会から、第14期日本学術会議の第5部（工学系・経営工学）ならびに第3部（経済学系・経営学）の会員候補として、**近藤次郎**・**松田武彦**両氏をご推薦いたしました。お二方も当選され、**近藤次郎**氏は、更に第14期日本学術会議会長に再選されました。OR学会会員からは、お二方のほか、**竹内啓**氏（東京大学先端科学技術研究センター教授）、**今井兼一郎**氏（日本工業技術振興協会理事）、**市川博信**氏

（東京工業大学教授）の三氏が日本学術会議会員に選任されましたので、お知らせいたします。

なお、日本の科学者の内外に対する代表機関である学術会議（定員210名）で、5人の本学会員が活躍されることは、OR学会ならびに経営工学分野の公的地位の向上にとって、一層強力な指導力が得られることと期待されます。